古石ひでさと4期目に向かっての議会活動　ひでさと

古　石　後援会だより

URL：http://古石.com/

空知多品様々　ふるさと納税

第　３３０２号
発行令和２年８月
古石　ひでさと後援会事務所
岩見沢市幌向南１条１丁目
TEL　２５－２２２５

市政についてご提案、ご意見などがありましたらお聞かせください。

E-mail-furuishi@gray-plala.or.jp

そらち多品済々 ―ふるさと納税返礼品―

① 宝水ワイナリーのワインセット＝岩見沢市

自社農園のブドウで飲みやすく

岩見沢市が新たに返礼品に加えた宝水ワイナリーのワイン。2本セットが2種類ある

一面に広がるブドウ畑で生育状況をみる倉内武美社長

ヘメモ＞1本1500円で、「R・C・C・A」を含むセットは2万円以上の寄付、「ポートランド」を含むセットは1万5千円以上の寄付でそれぞれ選べる。4本セットも。岩見沢市の酒販店などで販売している。問い合わせは同社☎0126・20・1810へ。

ならちかな斜面に青々とした葉が茂り、透き通るような緑色のブドウの房が連なる。4日、岩見沢市の宝水ワイナリーが運営する約10㌶の畑で、倉内武美社長（74）は「順調に育っています」と笑顔を見せた。

同社がワインの醸造を始めたのは2006年。自慢の畑は、大泉洋さん主演でワイン造りに取り組む家族を描いた映画「ぶどうのなみだ」（14年公開）のロケ地にもなった。映画を見たファンから「ぜひ飲みたい」との声もあり、岩見沢市は7月から同社のワインをふるさと納税の返礼品に加えた。

透明感のある口当たりで後味に果皮の酸味が残る「R・C・C・A　雪の系譜　バッカス2019」（白）の原料は自社農園のブドウだけ。市内産ブドウを使う「オレンジシンクロゼ2018」はイチゴのような香りで甘酸っぱく、倉内社長は「若い女性から『これはやばい。飲み過ぎちゃう』と言われます」と笑う。

この2本のセットのほか、市内産ブドウで造った「ポートランド2019」（白）と余市産ブドウを使う「キャンベル・アーリー2018」（赤）のセットも返礼品だ。倉内社長は「飲んだ後は岩見沢に来て他のワインもどうぞ」と話す。（中沢弘一）

◇

居住地以外の自治体に寄付すると、返礼品がもらえるふるさと納税。特産品やそのマチならではの体験型サービスも取りそろえる空知の「多士済々」なら240「多品済々」の返礼品を紹介する。（10回連載します）

ドローン防除に熱視線

美唄・ＩＣＴ農業推進協が実演会

【美唄】情報通信技術（ＩＣＴ）を活用したスマート農業の実現を目指す市ＩＣＴ農業推進協議会は18日、市上美唄のほ場で、小型無人機ドローンによる防除とロボットトラクターの試験走行を行う実演会を開き、近隣農家などが見学した。市は本年度から市内でドローンや無人ヘリコプターでの防除と、水田の自動水管理システムの実証実験を開始している。

実演会には市内外から農業関係者ら約80人が参加。農薬散布を想定したドローンの自動飛行や、無人ロボットトラクターによる耕起が行われた。いずれも衛星利用測位システム（ＧＰＳ）を利用し、タブレットで遠隔操作が可能で、農作業の省力化が期待される。

市内で小麦や大豆などを育てている橋本昌宏さん（44）は今年、防除を行うドローンを導入したといい、「操縦は慣れるまで難しかったが、作物をトラクターで踏まないので良い。ロボットトラクターも興味がある」と話した。同協議会の長谷川彰徳会長は「５年後にはきっとスマート農業が普及し、労力の軽減、作業時間の短縮が実現するはず」と期待を込める。（石川実和）

立ち向かう農業

子育て中の遊水地 視察

長沼でタンチョウ検討協部会

【長沼】町と札幌開建などでつくる「タンチョウも住めるまちづくり検討協議会」の地域づくり専門部会は18日、タンチョウのつがい1組が子育て中の舞鶴遊水地を視察した。ひな1羽は生後2カ月半まで育っているが、一家は、強い日差しを避けて草むらに潜んだままの姿を見せなかった。

関係者約30人は、2班に分かれ、順番に立ち入り制限区域内の堤防にバスを乗り入れ、車内から子育てエリアを観察した。調査担当の正富宏之・専修道短大名誉教授（鳥類生態学）は、ひなの現状について「順調に育ち、羽を広げると親と同じくらいの大きさに見える。あと10日ほどで飛ぶ練習を始めるようになる」と説明した。

また一家が、約200㌶の遊水地のうち、南東部の狭い範囲で暮らしていることから、このエリアでえさの量が確保できていると推測。さらにタンチョウは一般的にヨシを使い巣を作るが、このつがいはガマを使ったとみられるとした。

参加者は、来年2月ごろとみられる、親が子を突いて縄張りから追い出す「子別れ」後について質問。正富教授は「追い出された子

バス車内からタンチョウ一家を探す参加者

生後2カ月半のひな（左）。茶から白色へ羽根が生え替わってきた＝7日撮影（協議会提供）

今日の話題

誰しも、夏休みやお盆休みの帰省時に楽しみにしている懐かしい味がある。ソウルフードともいわれる地元の人にはなじみ深い味。そんな一つ、岩見沢市民や出身者に長年愛された「リスパン」がこの夏、姿を消した。

「リスパン」の愛称で親しまれた岩見沢市の菓子パン製造の空知菓子舗が7月末日で廃業した。創業47年、業績悪化による決断だった。市内小中学校の給食用のパン製造で知られる。市販向けも手掛け、食パン、菓子パンのほか、焼きそばやサラダを挟んだ総菜パンも人気だった。

包装袋に動物のリスが描かれていることから、「リスパン」と呼ばれた。市販向けは岩見沢と近郊の限られた地域のスーパーなどで販売。販売数は限られていて売り切れることも多かった。

市内高校の校内販売の「購買」でも大人気だった。売り出す3時間目の後の休み時間には、売り切れる前に好みのパンを買おうと、授業終了と同時にわれ先に購買に急ぐ争奪戦が日常的に繰り広げられていたという。部活後の帰りに空腹を満たす定番でもあった。

岩見沢っ子にとってリスパンは学校生活の思い出とともに心に刻まれている。

営業最終日の7月31日には同社で最後の即売会が行われた。平日にもかかわらず長い列ができ、2時間で500個を完売した。

8月上旬、市内スーパーのパン売り場に「リスパンの販売は終了しました」の案内があった。岩見沢出身ではないが、どこか懐かしいあのパンはもうないんだという寂しさを感じた。（山田　智）

2020.8.17

南空知業況 悪化止まらず

4～6月期 農業以外マイナス

【岩見沢】空知信用金庫（岩見沢）がまとめた4～6月の企業景気動向調査によると、業況が「良い」とする企業の割合から「悪い」とする割合を引いた業況判断指数（DI）はマイナス48・7で、調査を始めた1986年以来、3番目に低い水準となった。新型コロナウイルスの影響で、農業を除く全業種でマイナスとなった。（静間田翔）

過去3番目の低水準

中空知も大幅下落

小売、製造業に大打撃

【滝川】北海信用金庫（滝川）がまとめた中空知の4～6月期の景気動向調査によると、前年同期比で悪化のマイナス58・5となった。前期（1～3月期）のマイナス22・8ポイントから悪化幅が拡大した。新型コロナウイルスの影響で前期（1～3月期）からさらに8ポイント落ち込み、過去最悪だった2009年1～3月期に次ぐ悪化状況だ。

調査は中空知の計99の1割強にあたる11社が対象。1～3月期に次ぐ悪化状況だ。

調査は中空知の計99の1割強にあたる11社が対象。1～3月期に次ぐ悪化状況だ。

業種別では、最も悪かったのは小売業のマイナス67・3で、前期比38・2ポイント下落。一部スーパーやコンビニは堅調だったが、飲食店や学校に関連する企業は軒並み悪化した。新型コロナによる外出を控える動きは続き、サービス業は前期43・7ポイント減のマイナス66・7だった。建設業は同9・3ポイント減のマイナス25・6と悪化は比較的小さかったが、同信金の担当者は「来年度の公共事業の激減を懸念する声が各社から聞こえる」と話す。

出始めていることなどから、6・9ポイント改善しマイナス41・8。一方、同信金の担当者は「比較的感染者数が少なかった6月上旬までに行った調査のため、今後の感染状況によって見通しがさえない可能性もある」とした。

調査は南空知の3市4町と江別市の企業222社が対象。216社から有効回答を得た。

7～9月の全業種の見通しでは、人の外出の動きが

地域の話題をお寄せ下さい
美唄通信部　☎（0126）64・4642　FAX（0126）64・4644

美唄

市立病院建て替え基本計画

市民が望む病院に

市民委員会が意見交換　小児医療の維持必要

新しい病院の考え方を議論した市民委員会

【美唄】市立美唄病院の建て替えについて討論する、市の同基本構想・基本計画策定市民委員会（安田昌彰委員長、12人）の2回目の会合がこのほど開かれ、新しい病院の基本的な考え方を議論した。将来を見据え、美唄で必要な医療、市民が望む病院のあり方について意見交換した。

市が示したテーマ「超高齢社会のフロントランナーとして、美唄らしい地域包括ケアシステムの実現を図る」をたたき台に医療や介護について考えを出し合った。65歳以上の人口割合を示す高齢化率が全国平均28・9％を超え、美唄は43・2％を占めているという意味が「フロントランナー」に込められている。

委員からは「人口の高齢化と20年後には半減する人口減少を踏まえ、訪問診療や訪問看護が拡大されるべき。現在の新型コロナなどがあり、災害対策と感染対策など危機管理機能も求められる」「自宅で訪問介護を受け、在宅で暮らし、看取られたい」「在宅医療で24時間対応できる医療機関がいい。病院の負担は大きいが、安心して暮らせる」などの発言があった。

市立美唄病院でも現在、多職種「びばネット」の取り組みで在宅医療、訪問看護24時間体制を導入している。訪問看護は初の2人から現在3人に増やし、年間延べ900件実施。介護型療養病床の廃止に伴い、市内しろした病院が介護医院に転換したほか、花田病院が来年計画している。

病院事務局は「市立病院の療養病床には現在35人ほどの患者がおり、すぐ市内の介護医療院に移行するのは難しい」として、現在必要な療養病床も市内の患者数が減る長期見通しに対応した病床区分の検討が必要になってくると説明した。

医療連携について、委員から「連携体制は現在もあるが、より強固なものにしなければならない」とし、「医師の確保も難しいので地域医療連携推進方針を立ち上げるべきだ」と提言。砂川市立病院を核に周辺医療機関や介護施設も入り、医師や看護師が行き来するほか、医薬品の共同購入などもできる機構を立ち上げるように求めた。

このほか、委員からは「地域の将来のためにも小児医療の維持拡大は必要」「病院建設が前提になっているが、忘れてはいけないのは将来の人口が半分になること。造った建物は必ずお荷物になる」と強調。老朽したMRIは、せき損センターと契約利用していることを例に挙げ、「近隣に病院があるのだから、賢く見定めてほしい」という意見もあった。【五十嵐悟】